

自然災害を経験した市町村保健師の災害時保健活動経験に対する肯定的意味づけを促す外傷後成長指標の作成

井 口 紗 織 (千葉大学運営基盤機構)

目的：自然災害を経験した市町村保健師の災害時保健活動経験に対する肯定的意味づけの促進に資する外傷後成長指標（以下、指標）を作成し、内容妥当性と表面妥当性を検証する。

方法：文献検討より自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長のきっかけとなった災害時保健活動経験と経験に対して保健師が意味づけた内容を抽出し、災害サイクルの時期ごとに分類整理し、指標案を作成した。過去10年以内に発生した自然災害で統括的立場で保健活動を実施した保健師9名に対する質問紙・インタビュー調査により content validity index を確認し、指標案の内容妥当性・表面妥当性を検証した。

結果：指標案の scale-CVI は0.91であり、指標全体の妥当性が確認された。item-CVI が0.78に満たない4項目を削除し、対象者の意見をもとに31項目を修正し、新たに5項目を作成した。結果、保健師の自己肯定を促す11項目、地域住民や活動で協働した他者との関係への肯定的認識を促す16項目、保健師として価値観の向上や専門性への気づきを促す25項目で構成される計52項目の指標となった。時期別では、[超・急性期] 9項目、[亜急性期] 28項目、[慢性期] 6項目、[全ての時期を通して] 9項目であった。

考察：本指標は、被災自治体の人材育成研修における保健活動の振り返りにおいて、省察的ツールとして活用でき、経験に対する肯定的な意味づけが促進されることにより、保健師の外傷後成長の促進に寄与すると考える。

KEY WORDS : indicator, posttraumatic growth, public health nurses, natural disaster

I. はじめに

災害対策基本法より日本の市町村は、災害時に住民に最も身近な基礎自治体として、住民の生命、身体、財産の保護を応急対応、復旧・復興、防災に至るまで実施する。その市町村に所属する保健師は、自治体職員として現場の最前線で地域住民への健康支援に一貫してかわる唯一の専門職である¹⁾。近年は、受援調整や避難行動支援が市町村業務に加わり、災害時に期待される保健師の役割が拡大するとともに対応力を高めていくことが求められている^{2), 3)}。

災害時の市町村保健師の役割機能の発揮が期待される一方で、被災地の市町村保健師は、惨事ストレスのハイリスク率が高く、ストレスが長引く傾向にあることが指摘されている⁴⁾。その要因として、被災地内の保健師は、自身や身近な人の被災体験、住民から直接非難を受けたり辛い経験を聞いたりすることによる共感性疲労や二次的外傷体験があること、業務多忙な時期が長く続くことに加え、消防や警察といった組織と比較し、危機を想定

した訓練や惨事ストレス対策が十分でない^{4), 5)} ことが挙げられる。災害が頻発する本邦においては、被災地の市町村保健師が持続的な支援者として機能し続けるために、災害時の活動を意味づけていくこと¹⁾、中長期的視点に立った組織的取り組み、すなわち、研修の充実や、活動後の振り返りの実施が重要である⁶⁾。

そこで、筆者は、困難や苦悩を伴う経験が、振り返られ、意味づけられることで心理的成長をもたらすという外傷後成長 (posttraumatic growth: PTG) の概念⁷⁾に着目した。特に、職業的支援者が災害時に経験した困難な出来事は専門職者としての成長をもたらすとされ⁸⁾、先行研究において、自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長の概念を明らかにした⁹⁾。保健師の外傷後成長は、「自己肯定」、「他者との関係に対する肯定的認識」、「保健師の職業に対する信念や価値観の向上」の3領域からなり、保健師が自身の災害時保健活動における自律的な行動や他者との連携といった経験を振り返り、それらの経験を肯定的に意味づけていくことで、自分自身を認め、他者や地域への理解と信頼を深めながら、保健師の役割を再認識し、将来の災害への備えに繋がる対処行動や今後の保健活動を計画するといった成長をしてい

た。このことから、保健師の振り返りと、外傷後成長の概念に基づく意味づけを支援することで、ストレス対策のみならず、専門能力の育成につながると考えた。

看護実践の振り返りでは、自身の経験を看護の知に照らすことで、感情や課題を明らかにし、他の選択肢を想像できるとされる¹⁰⁾。災害を経験した保健師にも、自身の経験を照らし合わせ、評価することの助けとなる省察的ツール、すなわち指標があることで、効果的な振り返りが可能になると考えた。本研究では、自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長の概念⁹⁾を基盤にし、保健師が自身の経験を評価し、意味づけを方向づけるための目印となる指標を作成する。

本研究で開発する指標は、保健師の災害時の経験に対する肯定的意味づけの促進と将来の災害発生に向けた保健活動に対する意識づけにつながるものとして期待でき、災害時の活動推進や、平時の予防的活動に貢献すると考える。

II. 研究目的

自然災害を経験した市町村保健師の災害時保健活動経験に対する肯定的意味づけの促進に資する外傷後成長指標（以下、指標）を作成し、内容妥当性および表面妥当性を検証する。

III. 用語の定義

1. 自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長⁹⁾：自然災害を経験した市町村保健師が、災害時保健活動の経験を振り返り、肯定的に意味づけることで、「自己肯定」、「他者との関係に対する肯定的認識」、「保健師の職業に対する信念や価値観の向上」の3領域で新たな見方や考え方ができるようになること。

2. 経験：成長のきっかけとなった災害時保健活動の中の出来事と、出来事に対する受け止めや主観的な思い、感情。

3. 経験の意味づけ：経験を、長期的な時間軸の中で組織立て、そこから気づきや教訓を見出していくこと。

4. 自然災害を経験した保健師の外傷後成長指標：自身が行った保健活動の経験を評価したり、経験に対する考えを深めたりするための目印・目安。指標項目は保健師の外傷後成長につながった災害時保健活動の経験と意味づけの内容を記述する。

IV. 方法

研究の構成を図1に示す。

【研究1】指標（案）の作成
方法：文献調査

【研究2】指標（案）の妥当性の検証
方法1：質問紙調査
方法2：インタビュー調査

自然災害を経験した市町村保健師の
外傷後成長指標

図1 研究の構成

1. 研究1：自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長指標（案）の作成

国内文献は医中誌Web、海外文献はPsycINFO、MEDLINE、CINAHLを用い、キーワードを、国内文献では“災害”“活動”“保健師”、海外文献では“posttraumatic growth”“disaster”“public health nurse”を組み合わせ、TedeschiとCalhounが外傷後成長の概念⁷⁾を発表した1996年から2019年の文献を検索した。文献は、「日本の被災市町村に勤務する保健師の災害時保健活動の経験とその経験に対する受け止めや思いが記述されている」ものを採用した。保健活動は管理的業務に特化したものではなく、災害時の保健活動全般が記載されているものとした。採用基準に合致すると考えられた文献に、引用文献から重要と思われる文献を追加し、選定文献の質評価を行った。

対象文献から、「保健師の外傷後成長のきっかけとなった災害時保健活動経験の内容」と、「災害時保健活動経験に対する意味づけ」が記述されていると読み取れる部分をデータとして抽出した。各データを意味内容が損なわれないよう整理しコード化した。各コードには、保健師の経験の時期に応じて、災害サイクルに基づく時期である「超・急性期」、「亜急性期」、「慢性期」のラベルをつけた。全ての時期を通した経験と判断したものには「全ての時期を通して」のラベルをつけた。さらに、自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長の概念⁹⁾から、「自己肯定」、「他者との関係に対する肯定的認識」、「保健師としての信念や価値観の向上」の3領域ラベルをつけた。コードは、時期別に並び替え、時期ごとの枠組みの中で、3領域別に意味内容の類似性に基づき分類整理し、指標項目として示した。

2. 研究2：内容妥当性、表面妥当性の検証

1) 研究デザイン

質的・量的データを用いることで結果のよりよい理解を得ることが可能となる¹¹⁾ことから、混合研究法説明的デザインを用いた。

2) 対象者

発災から1年以上10年未満の激甚災害に指定された自然災害による被災地の市町村で、災害時に統括的立場で災害時保健活動を実施した経験を有する健康状態が良好な保健師9名。

3) 調査方法

(1) 調査方法1：質問紙調査

①方法：インタビュー調査に先立ち、対象者に質問紙を送付した。調査の内容は、作成した指標（案）の妥当性を検証するために、各項目について「妥当である」「おおむね妥当である」「あまり妥当でない」「妥当でない」の4件法で回答を求めた。その際、統括的・管理的立場としてのみならず、スタッフレベル保健師の経験と意味づけとして妥当かを評価してもらった。各項目の表現の適切さや項目原案の過不足については自由記載で意見を求め、インタビューの基礎資料として用いた。

②調査期間：2020年9月

③分析方法：Lynnの内容妥当性の定量化の方法¹²⁾を参考に、content validity index（以下、CVI）を求めた。項目ごとの妥当性（item CVI）は肯定的評価の割合を確認して0.78以上を妥当性があることを示すとし、全体の妥当性（scale-CVI）は0.90以上であれば妥当性があることを示すとした¹³⁾。

(2) 調査方法2：インタビュー調査

①方法：質問紙の回答内容をもとに、回答の根拠や表現の適切さ、項目の過不足について、意見を聞いた。1人につき60分程度の半構成的面接を、対面もしくはオンラインビデオ通話、電話で実施した。

②調査期間：2020年10～12月

③分析方法：逐語録を作成し、逐語録から各項目について語られた内容、および過不足について語られた内容をデータとして抽出し、意見として整理した。整理された意見を集約し、集約された意見をもとに、各項目を修正し、不足している項目は追加した。

3. 倫理的配慮

千葉大学大学院看護学研究院倫理審査委員会の承認後（承認番号R2-21）、対象者に、研究目的、調査内容、自由意志による研究への参加と途中辞退の保証、個人情報保護、結果の公表等について文書と口頭で説明し、同意を得た。

V. 結 果

1. 研究1

16文献^{11)~16)}を分析対象とした。16文献が取り扱う災害の種別は、地震・津浪の複合災害が6件、地震・放射

線の複合災害が3件、地震が4件、風水害が3件であった。指標（案）の項目は、51項目を抽出した。時期別では、「超・急性期」9項目、「亜急性期」27項目、「慢性期」7項目、「全ての時期を通して」8項目であった。外傷後成長の領域別では、「自己肯定」が12項目、「他者との関係に対する肯定的認識」が17項目、「保健師としての信念や価値観の向上」が22項目であった。項目を時期ごとに並び替え、51項目の指標（案）として整理した（表1）。

2. 研究2

1) 対象者の概要

6市町に所属する保健師経験年数20年以上の統括的立場の保健師9名であった。年代は40代が1名、50代が8名であった。職位は、課長が2名、課長補佐および係長が7名であった。経験した災害の種別は、地震と津波の複合災害が2名、地震が2名、風水害が5名であった。

2) 質問紙調査の集計結果

指標（案）51項目に対する内容妥当性の質問紙調査の結果、scale-CVIは0.91であり、全体の妥当性が確認された。item-CVIが0.78以上であった項目は37項目であり、item-CVIが0.78に満たなかった項目は4項目であった（表1）。

3) インタビューにより得られた意見

指標（案）の各項目に対する内容妥当性、表面妥当性に関する意見を集約すると、指標（案）全体に対して、「活動経験の内容を断定的にしない方がよい」、「意味づけの項目を読むことで励まされるような前向きな言い回しがよい」などの意見を得られた（表2）。

4) 指標の修正方針

指標項目の精練は、2) 3) の質問紙調査およびインタビュー調査で得られた結果をもとに、修正方針を設定した（表3）。また、対象者の意見で内容の不足が指摘されている場合は、新たに項目を作成し追加した。

5) 指標の精練結果

指標の精練では、4項目を削除し、31項目の表現を修正し、5項目を追加した（表4）。修正・追加した項目は、表4中に示す。その結果、時期別では、「超・急性期」が9項目、「亜急性期」が28項目、「慢性期」が6項目、「全ての時期を通して」が9項目であった。外傷後成長の領域別では、「自己肯定」が11項目、「他者との関係に対する肯定的認識」が16項目、「保健師としての信念や価値観の向上」が25項目であった。結果、52項目の指標として整理した。対象者9名に精練結果を提示し、意見を求めたところ、追加の修正がなかったため、指標の完成とした。

表1 自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長指標（案）

超・急性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	item-CVI
自己肯定	自己肯定	1 被災を経験し、不安や恐怖を感じながら活動した	不安や恐怖、辛さといった感情があったことをありのままに受け入れられるようになった	0.89
		2 先を考える余裕のない中、避難者の誘導や確認、物資の確保など次々と業務に追われた	反省点もあるが、目の前のできることに無我夢中で取り組み、精いっぱい頑張ったと思えるようになった	0.89
		3 避難者の誘導や救護所でのケアなど、即時判断・即実行が求められるが、人員も少なく指揮を取る人や相談できる人もいない中、指示待ちでなく自らの判断で行動した	困難をよく乗り越えたと思えるようになった、自信がついた一方で、未熟であったと考えられるようになった	1.00
		4 不眠不休で業務を継続した	困難をよく乗り越えたと思えるようになった、そのときできることを精いっぱいやったと思えるようになった	0.89
		5 家族と連絡が取れなかったり、会えなかったりした状況の中、業務を継続した	辛さや罪悪感を持っていたことを受け入れ、当たり前前の生活ができることに感謝するようになった	0.89
	保健師としての信念や価値観の向上	6 災害対策本部からの要請や住民対応が次々と押し寄せた	災害時は対策本部との連携や素早い判断力、行動力が求められることを認識した	1.00
		7 ライフラインが寸断され、情報や人員、マニュアルが十分でない中、判断や行動を求められた	人員や資源が不足する中での活動手順を平時から準備・確認しておく必要性を認識した	1.00
		8 避難者に対する救護活動や身を挺しての健康支援、手段を開発しての住民支援を行った	地域住民の命と健康を守るという気持ちを強くした	1.00
		9 平時から関係機関と要配慮者の名簿を作成するなど連携していたことで協力しながら活動できた	平時から住民や関係機関と協働し、地域のつながりを強固にしておくことの重要性を再認識した	1.00
亜急性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	item-CVI
自己肯定	自己肯定	10 自身の食事や入浴、休息といったことも不十分の状態の中、業務を継続した	公務員・保健師としての自分と個人としての自分のはざまで悩んだことを受け入れ、自身や家族を大切にすることの大事さに気づいた	1.00
		11 自宅に戻れないなど、自身や家族との生活より業務を優先して活動した	家族に対する申し訳なさ、後悔、心配といった気持ちがあったこと、悩んだことを受け入れられるようになった	0.89
		12 避難所における保健活動の中で、十分にできないと思うことに直面したり、ジレンマを感じながら活動した	戸惑い、葛藤、不安といった様々な感情があったことをありのままに受け入れられるようになった	0.75
		13 住民から非難されたり、住民の被災体験や辛さを直接聞き続けた	辛さや無力感を感じていたことを受け入れられるようになった	1.00
		14 避難所で住民から感謝されたり、ともに語り合う中で、住民から生きていることへの感謝の念を聞いた	住民に励まされ、感謝の気持ちを強くした	1.00
		15 外部支援者の調整や情報整理、受け入れ準備に苦労しながら活動した	苦しさ、無力感などの様々な感情があったことを受け入れられるようになった	0.78
		16 同僚が苦労しながらも業務を継続したり、迅速に判断や行動する姿を見た	同僚の職員や保健師に対し、ねぎらいと尊敬の念を強めた	1.00
		17 甚大な被害を受けている状況の中で、地元の関係機関が活動を再開する姿を見た	地元の関係機関に対し頼もしさを感じるようになった	0.89
	他者との関係に対する肯定的認識	18 避難所での保健活動や、新たに発生した健康課題に対し、地元の関係機関と連携することで支援できた	地元の関係機関に対する連帯感が強まった	0.89
		19 避難所運営において保健所保健師の支援を受け活動した	保健所保健師に対する信頼が深まった	0.71
		20 外部支援者である保健師が保健師として共通の視点をもって活動してくれた	外部支援者の保健師に対し、信頼を寄せ職業的連帯感を強めた	0.89
		21 外部支援者の調整に苦労しながらも支援者から多様な支援を受け活動した	外部支援者に対する一時的な信頼と感謝の念を強めた	0.89
		22 避難者の受け入れ先である自治体や保健師から支援を受けた	避難者の受け入れ先自治体や保健師に対し、職業的連帯と感謝の念を強めた	0.80
		23 住民や住民組織が自主的に活動したり、工夫して過ごしている姿を見た	住民に対し、信頼と誇りの気持ちを強めた	0.89
		24 住民との関わりの中で共に語り合ったり、正直な気持ちを話されたりした	住民に対する親密感や理解を深めた	0.78

保健師としての信念や価値観の向上	25	避難所で健康相談や物資支援、環境整備、関係機関との連絡調整など、避難者のニーズに合わせた保健福祉活動を実施した	避難所をひとつのコミュニティととらえ、住民個人の健康課題を発見し、つなげるという基本的な保健活動が重要であると考えようになった	0.89
	26	避難所での環境整備や避難者への対応が難航する中で、地域資源を開拓したり、上司に進言したりした	困難な状況下でも住民の生活や環境をよりよくしたいという気持ちを強くした	1.00
	27	外部支援者の調整や活用に苦慮しながらも、共に活動した	効果的な受援には、情報共有と互いのニーズを把握し柔軟に対応する力を養っておく必要があることを実感した	0.78
	28	地域や避難所で被災住民が互いに助け合い励まし合う様子を見た	平時から地域住民とともに地域とのつながりを意識した地区活動を行う重要性を再認識した	1.00
	29	平時から関係性のあった住民や関係機関とスムーズに連携したり支援ができた	平時から地域住民や関係機関と顔の見える関係を構築しておく重要性を再認識した	1.00
	30	被災の影響により地域住民の健康課題が増加し、判断とスピード感のある行動が求められた	平時から住民の健康課題に対する対応力を養っておくことが災害時保健活動の備えになることを実感した	1.00
	31	被災による影響が続く中、業務を継続したり、住民に必要な事業をいち早く再開したりした	住民の生命と健康を守るという使命感を強くした	1.00
	32	発災後の保健活動の中で、平時に支援していた住民だけでなく、潜在していた要支援者を見つけて支援した	平時から地域に密着した地区活動を行い、ネットワークを生かしたアウトリーチ活動を行うことが重要であると再認識した	1.00
	33	市町村合併や保健師の業務分担制、分散配置などの影響から保健師同士で情報共有が十分でないまま活動した	平時から地域のことを知り、保健師同士での情報共有や関係性を構築しておくことの重要性を再認識した	0.78
	34	被災により職員や地域資源に影響があったり、マニュアルやガイドラインが十分でなかった中で、方法を模索するなどして活動した	平時から、外部支援が入るまでの対策、災害対応マニュアル、要配慮者リストの作成、外部支援の調整や体制づくりについて検討しておく必要性を実感した	1.00
	35	保健師以外でも対応可能な活動に人材がとられ、保健活動に支障をきたした	保健師が自治体の災害対策の中で専門職として位置づけられ活動できることの重要性を認識した	0.86
	36	同僚とともに不眠不休で活動したり、住民からの苛立ちを直接受けたりした	保健師や職員の健康を守ることの重要性を認識した	0.89
慢性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	item-CVI
自己肯定	37	災害による被害とそこからの復旧復興を目の当たりにしてきた	自然の中で生かされていることを実感し、新たな価値観について考えるようになった	1.00
	38	長期的な対応が必要な中で、組織内部や地元の関係機関と定期的に顔を合わせ、目的を共有しながら支援活動を継続した	組織内部や地元の関係機関に対し、連帯感を強めた	0.89
	39	外部の研究者などに経験を話す機会を得て、活動をまとめたり振り返った	外部の経験を聞いてくれるものに対して、相談者や経験を託せる者として信用できるようになった	0.89
他者との関係に対する肯定的認識	40	被災による影響が長期化する中で、避難者の点在による課題や地域住民の新たな健康課題に対応した	住民の被害状況や背景が様々な中で、それぞれの住民のニーズをとらえ、具体的支援方法を学び続けることが重要だと思うようになった	0.89
	41	家庭訪問や仮設住宅における活動の中で、住民の精神的訴えや不安を聞いた	地域住民と意思を共有し、連帯感を強め、アウトリーチによる活動を継続していくことの重要性を実感した	1.00
	42	時間経過や被害内容により健康課題に変化が生じる中、長期的に支援を継続した	地区担当保健師による活動など、中長期的視点で継続的な支援を行う重要性を再認識した	1.00
	43	平時から支援をしていた住民が各関係機関の支援を受け生活が継続できた姿を見たり、避難住民が笑顔で避難所を去っていく様子を見たりした	保健師としての達成感や満足感を感じた	0.56
全ての時期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	item-CVI
他者との関係に対する肯定的認識	44	職場の同僚と経験や思いを共有しながら一丸となって頑張ってきた	仲間の支えがあったから乗り越えられたと思えるようになった	1.00
	45	家族の協力を受けて多忙な日々を乗り越えた	家族の支えがあったから乗り越えられたと思えるようになった	0.89
	46	保健所保健師と連携して活動した	保健所保健師に対し、連帯感を強めた	0.43
	47	内部の事務職とともに協力して活動した	内部の事務職に対する団結感が強まった	0.89
	48	同僚の保健師とともに経験や思いを共有しながらともに活動したり、同僚保健師が活躍する姿を見た	同僚の保健師に対する結束が強まった	1.00
	49	近隣市町村が類似的の被害を受ける中、近隣市町村の保健師が頑張っている状況を見聞した	同様に被害を受けた被災地の保健師に対し頼もしさを感じるようになった	0.89
	50	避難所や仮設住宅において、保健師が中心となり、要支援者に対する直接的な支援活動を実施してきた	平時から復旧復興期にわたり住民と接点がある保健師にとって、地区活動が重要であることを再認識した	0.89
保健師としての信念や価値観の向上	51	発災直後から長期的に地域住民とともに保健活動を実施してきた	地域住民との協働を意識した平時の保健活動の重要性を再認識した	1.00

表2 指標（案）に対する意見

	意見
①	活動経験の内容や活動が展開された場所は、被災規模や組織の体制によって多様であるため、活動経験の内容や場所の断定的でないほうがよい。
②	年月が経っても受け入れられないこともあるため、どのような自分でもよいということが伝わりやすい。
③	指標を見て振り返ると辛い経験を思い出すが、意味づけの欄を読むことで励まされるので前向きな表現がよい。
④	指標項目の順序性は、感情的な項目（自己肯定の領域）よりも保健活動の事実（保健師としての信念や価値観の向上）の項目が先にある方が振り返りやすい。

表3 修正方針

	修正方針
①	Item-CVIが0.78未満であったは、妥当性が確認されないため削除する。
②	意見①より、活動経験の内容や場所の断定的表現を避ける。
③	意見②および③より、保健師が自己を認められればよいことが伝わる前向きな表現に修正する。
④	意見④より、指標項目は、「保健師としての信念や価値観の向上」、「自己肯定」、「他者との関係に関する肯定的認識」の順に並び替える。

VI. 考 察

1. 指標の妥当性

1) 研究1

指標（案）の項目は、先行研究において大規模災害を経験した保健師に対する詳細なインタビュー調査から得られた結果¹⁴⁾を含む、保健師の災害時保健活動経験とその経験に対する思いが記述されている16文献から、抽出して作成した。指標開発のプロセスにおける項目収集の方法として質的研究を使用することは、新しいスケールの妥当性を高め¹³⁾、測定したい現象を解明するうえで重要とされる¹⁵⁾。さらに、複数の種別の災害を経験した保健師の活動と思いが記述された文献を幅広く用いたことにより、指標（案）項目の包括性が保たれたと考える。

2) 研究2

項目の精練は、質的・量的に専門家審査を行った。依頼した対象者は、災害時保健活動に対する豊富な経験を有する統括的立場の保健師9名であった。内容妥当性指標の算出においては、5～10名のエキスパートパネルを

得ることで、安定した内容妥当性指標を算出できるとされる¹²⁾。9名が参加した本調査は、安定したitem-CVIを得ることができたと考えられる。さらに、項目の精選課程では、公衆衛生看護に関する研究者から定期的にスーパーバイズを得た。専門家審査には、最低3～5人以上の研究者と実践者からなる専門家が必要とされる¹³⁾。本研究はそれらを満たしており、指標の妥当性が担保されたと考える。

2. 指標の特徴

「超・急性期」には、9項目が精選され、そのうち、4項目が「保健師としての信念や価値観の向上」領域の項目であり、5項目が「自己肯定」領域の項目であった。「超・急性期」には、ライフラインが寸断されたり、情報や指揮命令が十分でなく混乱したりする中で、保健師らは他者と系統だった連携ができず、自身の判断を求められる経験をしていた。また、保健師らは、自分自身や家族のことを二の次にして、無我夢中で業務をしていた。保健師らは、これらの経験を振り返り、平時から災害時の活動手順や地域のつながりを強化しておく必要性を再認識し、困難をよく乗り越えたと思えることができるようになったという意味づけをしていた。超・急性期は、支援対象者への世話と、自分自身や家族の安全を確保することとのバランスを取ろうとすることから、精神的健康に悪影響を及ぼしやすい¹⁶⁾。この時期の活動の振り返りでは、保健師が、自身の自律的な行動を認め、当時の判断が正しかったと自信をもてるような意味づけが促進されることが期待される。

「亜急性期」では、28項目が精選され、そのうち、14項目が「保健師としての信念や価値観の向上」、5項目が「自己肯定」、9項目が「他者との関係に対する肯定的認識」であった。亜急性期の項目が多かったことは、保健師がこの時期に、避難所を拠点とした健康支援活動を継続するとともに、在宅被災者に対する地域支援活動を地域住民やボランティア、外部支援者と連携して行うなど、保健師の活動の場が拡大し、活動内容も多様化する¹⁷⁾ことを示していたと考えられた。特に、亜急性期は、外部からの支援者が到着し、受援調整における困難を感じながらも、内外の関係者や支援者との協働を経験することを通し、他者への信頼感の向上を意味づけていた。さらに、被災した地域住民への直接的な支援を繰り返すといった経験に対して、住民の生命や健康を守るといった保健師としての信念を強くしたと意味づけていた。亜急性期の活動の振り返りでは、苦勞しながらも協働した様々な他者を信頼でき、いざというときに頼れる他者との関係性構築の重要性を認識し、行動に移すといった

表4 自然災害を経験した市町村保健師の外傷後成長指標

超・急性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	修正・追加
保健師としての信念や価値観の向上	1	ライフラインが寸断され、情報や人員、マニュアルなどが十分でない中、判断や行動を求められた	人員や資源が不足する中での活動手順を平時から準備・確認しておく必要性を改めて認識した	*
	2	災害対策本部からの要請や住民対応が次々と押し寄せた	災害時是对策本部との連携や素早い判断力、行動力が求められることを再認識した	*
	3	避難者に対する救護活動や身を挺しての健康支援、手段を開発しての住民支援を行った	地域住民の命と健康を守るという保健師としての使命感を強くした	*
	4	平時から関係機関と要配慮者の名簿を作成するなど連携していたことで協力しながら活動できた、または準備や共有が不十分で思うような活動ができなかった	平時から住民や関係機関と協働し、地域のつながりを強固しておくことの重要性を再認識した	*
	5	被災を経験し、不安や恐怖を感じながら、または無我夢中で活動した	不安や恐怖、辛さ等の感情を持っていた自分自身を認め、そのような自分でもよいと思えるようになった	*
	6	要配慮者の安否確認、避難者の誘導や救護、物資の確保など次々と業務に追われた	反省点もあるが、自身が置かれた体制の中でできることに取り組み、頑張ったと思えるようになった	*
	7	即時判断・即実行が求められるが、指揮を取る人や相談できる人が少ない中、指示待ちでなく自らの判断で行動した	困難をよく乗り越えたと思えるようになったり、課題を見つけたと考えられるようになった	*
	8	休みを十分にとれないまま、業務を継続した	困難をよく乗り越えたと思えるようになったり、そのときできることを精いっぱいやったと思えるようになった	*
	9	家族と会えなかったり、子どもの預け先に悩むなど自身の生活を優先にできない状況の中、業務を継続した	葛藤や悩み、辛さなどがあったことを認め、家族間でも事前の準備が必要だと考えるようになった	*
亜急性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	修正・追加
保健師としての信念や価値観の向上	10	被災住民への健康相談や物資支援、環境整備、関係機関との連絡調整など、避難者のニーズに合わせた保健福祉活動を実施した	避難所をひとつのコミュニティととらえ、住民の生活を見て健康課題を発見し、つなげるという基本的な保健活動が重要であると考えられるようになった	*
	11	避難所での環境整備や避難者への対応が難航する中で、地域資源を開拓したり、上司に進言したりした	困難な状況下でも住民の生活や環境をよりよくしたいという気持ちを強くした	
	12	外部支援者の調整や活用に苦慮しながらも、共に活動した	効果的な受援には、事前からの情報共有と柔軟な対応力や受援に関する組織的な体制整備が必要であることを実感した	*
	13	地域や避難所で被災住民が互いに助け合い励まし合う様子を見た	平時から地域住民とともに地域とのつながりを意識した地区活動を行う重要性を再認識した	
	14	平時から関係性のあった住民や関係機関とスムーズに連携したり支援ができた	平時から地域住民や関係機関と顔の見える関係を構築しておく重要性を再認識した	
	15	被災の影響により地域住民の健康課題が増加し、判断とスピード感のある行動が求められた	平時から住民の健康課題に対する対応力を養っておくことが災害時保健活動の備えになることを実感した	
	16	被災による影響が続く中、業務を継続したり、住民に必要な事業をいち早く再開したりした	住民の生命と健康を守るという使命感を強くした	
	17	発災後の保健活動の中で、平時に支援していた住民だけでなく、潜在していた要支援者を見つけて支援した	平時から地域に密着した地区活動を行い、ネットワークを生かしたアウトリーチ活動を行うことが重要であると再認識した	
	18	市町村合併や保健師の業務分担制、分散配置などの影響から保健師同士で情報共有が十分でないまま活動した、もしくは、平時から保健師間の情報共有に努めたり、災害研修を実施していたことから活動がうまくいった	平時から地域のことを知り、保健師同士での情報共有や関係性を構築しておくことの重要性を再認識した	*
	19	被災による職員や地域資源への影響があったり、マニュアルやガイドラインの作成や共有が十分でなかった中で、方法を模索するなどして活動した	平時から、災害対応マニュアル、要配慮者リストの作成や共有、外部支援が入るまでの対策、外部支援の調整や体制づくりについて検討しておく必要性を実感した	*
	20	保健師以外でも対応可能な活動に人材がとられ保健活動に支障をきたした、もしくは防災計画やマニュアルに保健師の活動が位置づけられていたため保健活動をスムーズに行えた	保健師が自治体の災害対策の中で専門職として位置づけられ活動できることの重要性を再認識した	*
	21	同僚とともに不眠不休で活動したり、住民からの苛立ちを直接受けたりした	保健師や職員の健康を守ること、仲間同士でサポートし合うことの重要性を改めて認識した	*
	22	外部支援者による自立していない活動や、方針の異なる活動をされることで、負担や衝突があった	自分が外部支援者として応援に行くときは、支援先のニーズを尊重し、伴走型の支援をしたいと考えられるようになった	追加
	23	被災による影響が続く中、業務を継続したり、住民に必要な事業をいち早く再開したりした	時間の経過や住民の状況の変化に応じて、業務の優先順位付けを行うことの重要性を再認識した	追加

自己肯定	24	自身の食事や休息が不十分であったり、家族を優先にできない状況の中、業務を継続した	公務員・保健師としての自分と個人としての自分のほごまで悩んだことを認め、自身や家族を大切にすることの大切さに気づいた	*
	25	自宅に戻れないなど、自身や家族との生活より業務を優先して活動した	家族に対する申し訳なさ、後悔、悩みなどは簡単に昇華できるものではなく持ち続けてよいと思えるようになった	*
	26	住民から非難されたり、住民の被災体験や辛さを直接聞き続け、苦しい思いをした	辛さや無力感を感じていたことを認められるようになった	*
	27	活動の中で住民から感謝されたり、住民から生きていることへの感謝の念を聞いた	住民に励まされ、感謝の気持ちを強くした	*
	28	外部支援者の調整や情報整理、受け入れ準備に苦労しながら活動した	苦しさや戸惑いといった様々な感情があったことを認め、課題を見つけたと考えられるようになった	*
	29	同僚が苦労しながらも業務を継続したり、迅速に判断や行動する姿を見た	同僚の職員や保健師に対し、ねぎらいの気持ちや結束感を強めた	*
	30	甚大な被害を受けている状況の中で、地元の関係機関が活動を再開する姿を見た	地元の関係機関に対し頼もしさと安心感を感じるようになった	*
	31	被災住民に対する保健活動や、新たに発生した健康課題に対し、地元の関係機関と連携することで支援できた	地元の関係機関に対する連帯感が強まった	*
他者との関係に対する肯定的認識	32	外部支援者である保健師が保健師として共通の視点をもって活動してくれた	外部支援者の保健師に対し、信頼を寄せ職業的連帯感を強めた	
	33	外部支援者の調整に苦労しながらも支援者から多様な支援を受け活動した	外部支援者に対する一時的な信頼と感謝の念を強めた	
	34	避難者の受け入れ先である自治体や保健師から支援を受けた	避難者の受け入れ先自治体や保健師に対し、職業的連帯と感謝の念を強めた	
	35	住民や住民組織が自主的に活動したり、工夫して過ごしている姿を見た	住民に対し、信頼と誇りの気持ちを強めた	
	36	住民との関わりの中で共に語り合ったり、正直な気持ちを話されたりした	住民に対する親密感や理解を深めた	
	37	住民から非難されたり、住民の被災体験や辛さを直接聞き続け苦しい思いをした	住民も混乱している時期であることを理解し、非難されることも起こり得えると思えるようになった	追加
慢性期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	修正・追加
保健師としての信念や価値観の向上	38	被災による影響が長期化する中で、避難者の点在による課題や地域住民の新たな健康課題に対応した	住民の被害状況や背景が様々な中で、それぞれの住民の生活やニーズをとらえ、具体的支援方法を学び続けることが重要だと思えるようになった	*
	39	家庭訪問や仮設住宅における活動の中で、住民の精神的訴えや不安を聞いた	地域住民と思いを共有し、連帯感を強め、アウトリーチによる活動を継続していくことの重要性を実感した	
	40	時間経過や被害内容により健康課題に変化が生じる中、長期的に支援を継続した	地区担当保健師による活動など、中長期的視点で継続的な支援を行う重要性を再認識した	
自己肯定	41	災害による被害とそこからの復旧復興を目の当たりにしてきた	自然災害の脅威を実感し、新たな価値観について考えるようになった	*
	42	長期的な対応が必要な中で、組織内部の職員や地元の関係機関と目的を共有しながら支援活動を継続した	組織内部や地元の関係機関に対し、連帯感をさらに強めた	*
	43	外部の研究者などに経験を話す機会を得て、活動をまとめたり振り返った	外部の経験を聞いてくれる者に対して、活動の振り返りや気持ちの整理としての活用が可能であると思えるようになった	*
全ての時期	領域	災害時保健活動の経験	経験の意味づけ	修正・追加
保健師としての信念や価値観の向上	44	避難所や仮設住宅、在宅被災者への活動において、要支援者に対する直接的な支援活動を実施してきた	平時から復旧復興期にわたり住民と接点がある保健師にとって、地区活動が重要であることを再認識した	*
	45	発災直後から長期的に地域住民とともに保健活動を実施してきた	地域住民との協働を意識した平時の保健活動の重要性を再認識した	
	46	家族の事情や被災場所・被災状況の差などで保健活動に参加したくても十分にできなかった	罪悪感、疎外感、焦りといった感情につながらないようフォローし合ったり経験を共有する機会を持つ必要性を感じた	追加
	47	保健所保健師と連携して活動した、もしくは様々な背景からあまり連携や支援がない中で活動した	平時から保健所保健師と顔見知りになったり、平時の地区活動における連携や災害時の連携の体制を構築しておく必要性に気づいた	追加
他者との関係に対する肯定的認識	48	職場の同僚と経験や思いを共有しながら頑張ってきた	仲間の支えがあったから乗り越えられたと思えるようになった	
	49	家族の協力を受けて多忙な日々を乗り越えた	家族に対する感謝の思いが強まった	*
	50	内部の事務職とともに協力して活動した	内部の事務職に対する団結感がさらに強まった	*
	51	同僚の保健師とともに経験や思いを共有しながらともに活動したり、同僚保健師が活躍する姿を見た	同僚の保健師に対する結束がさらに強まった	*
	52	近隣市町村が類似の被害を受ける中、近隣市町村の保健師が頑張っている状況を見聞きした	同様に被害を受けた被災地の保健師に対し頼もしさを感じるようになった	

*…表現を修正した項目

行動の意識づけが促されるとよいと考える。

「慢性期」は、6項目が精選され、そのうち、「保健師としての信念や価値観の向上」が3項目、「自己肯定」が1項目、「他者との関係に対する肯定的認識」が2項目であった。慢性期に保健師は、時間の経過とともに住民が生活場所を移していく中で、変化する健康課題に対応しながら、より地域に根差した支援に移行していく経験をしていた。その経験を通し、平時から地域住民や関係機関とともに活動をする重要性や、地域を基盤とした活動の重要性を再認識していた。この時期に、保健師は、コミュニティの尊厳、回復力、アイデンティティを高めるために、地域の文化を尊重した保健活動を実施する¹⁸⁾。慢性期の活動の振り返りでは、平時から地元の住民や関係機関とともに活動する保健師が、地域の文化や考えを尊重した日頃の地区活動の重要性を再認識できるようになるといった意味づけが深化するとよいと考える。

「全ての時期を通して」は、9項目が精選され、そのうち、「保健師としての信念や価値観の向上」が4項目、「他者との関係に対する肯定的認識」が5項目であった。災害発生からの継続的で長期的な住民支援活動を通して、平時から長期的に住民と接点がある保健師であるからこそ、平時からの住民との協働を意識した地区活動の重要性を再認識したという意味づけをしていた。さらに、同僚、他職種、関係機関など災害時の活動において関わりのあった他者との結束を強め、信頼感が増したという意味づけをしていた。これらの意味づけの深まりを支援することは、保健師の平時・災害時の保健活動に対する行動や、他者との関係性構築のための行動の意識化につながると考える。

3. 実践への示唆

本指標は、自治体保健師の標準的なキャリアラダーのキャリアレベルA 1～A 3（主に新任期から中堅期のスタッフレベル）の保健師に対し、被災市町村における階層別研修や圏域保健所管内での災害研修等の場面で使用されるとよいと考える。災害発生後は、長期的に続く災害対応と通常業務の再開といった多重業務に追われ、活動の振り返りが不十分であることが指摘されており⁵⁾、保健師らは自身の経験や思いを消化できないままストレスを抱えることが考えられる。新任期や中堅期の保健師にとっては、初めての災害経験であることも多く、振り返りを支援するツールが役立つと考える。保健師が、指標の「経験」部分を見ながら災害時の活動を振り返ることで、自身の経験を想起し、その上で、指標の「意味づけ」部分を見ながら改めて自身の経験を吟味すること

で、新たな気づきを得たり、ネガティブに捉えていた側面をポジティブに意味づけたりすることができると考える。指標を用いた振り返りを人材育成研修に組み込み、保健師が自己を肯定し、他者との関係を肯定的に意味づけ、災害時や平時の役割や機能について認識を深めることができれば、保健師のストレス対策のみならず、保健師の専門能力向上と平時および災害時の保健活動推進に寄与すると考える。

VII. 今後の課題

今後の課題は、本指標を活用した災害時保健活動の振り返り支援のための研修プログラムを開発し、その有効性や有用性を検証していくことである。

謝 辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様に心より感謝いたします。なお、本研究は公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金の助成を受けて実施した。本研究における利益相反はない。本研究は千葉大学大学院看護学研究科博士学位論文の一部を加筆修正したものである。

研究1 対象文献

- 1] Iguchi Saori, Miyazaki Misako, Ishimaru Mina: Experiences of Public Health Nurses after the Great East Japan Earthquake Lead to Post-Traumatic Growth. Health Emergency and Disaster Nursing, 5(1): 48–57, 2018.
- 2] Sato Mari, Atogami Fumi, Nakamura Yasuka, Yoshizawa Toyoko: Experiences of public health nurses in remote communities during the Great East Japan Earthquake. Health Emergency and Disaster Nursing, 3(1): 18–27, 2016.
- 3] Kayama Mami, Akiyama Tsuyoshi, Ohashi Akiko, Horikoshi Naoko, Kido Yoshifumi, Murakata Tazuko, Kawakami Norito: Experiences of municipal public health nurses following Japan's earthquake, tsunami, and nuclear disaster. Public Health Nursing, 31(6): 517–525, 2014.
- 4] 安達美香：台風10号による新得町での災害時保健活動 避難所・地域・職場での活動の実際と評価。北海道の公衆衛生 (43)：58–64, 2017.
- 5] 鈴木誠：水の恐怖と未経験の保健福祉活動。北海道の公衆衛生 (43)：45–48, 2017.
- 6] 渋谷美智子：【平時からの災害時要援護者支援】要援護者避難支援に備えた平時からの保健師活動 東日本大震災の経験を通じて。保健師ジャーナル, 70(9)：754–757, 2014.
- 7] 大場エミ, 安倍敬子, 吉田喜美江, 山田祐子：【東日本大震災から3年—福島からの報告】被災から3年目を迎える福島の保健師活動 避難・移転を経験した市町の保健師から。保健師ジャーナル, 70(3)：180–186, 2014.

- 8) 及川艶子：【東日本大震災から1年 保健師が受け止めたもの】【被災地の保健師から】宮城県仙台市 復興に向けた、市民の健康を守る活動のあり方とは、保健師ジャーナル, 68(3)：177-182, 2012.
- 9) 野々村久実枝：【自然災害時の保健師活動】阪神・淡路大震災の経験から、地域保健, 39(8)：46-51, 2008.
- 10) 藤巻真理子, 井倉久美子：【自然災害時の保健師活動】災害時要援護者への対応 高齢者・障害者 福祉避難所・地域包括支援センターでの対応を中心として、地域保健, 39(8)：26-37, 2008.
- 11) 小倉こずえ：【災害医療 危機管理の視点と組織作り】北海道南西沖地震における災害時の保健師活動、治療学, 36(9)：968, 2002.
- 12) 砂塚一美：【自然災害時の保健師活動】災害時要援護者への対応 乳幼児、地域保健, 39(8)：38-44, 2008.
- 13) 村上祥子：【平時からの災害時要援護者支援】三条市における災害時要援護者避難支援と保健師の役割 豪雨災害の経験を踏まえた体制の見直し、保健師ジャーナル, 70(9)：763-768, 2014.
- 14) 大石万里子：【東日本大震災から1年 保健師が受け止めたもの】【被災地の保健師から】福島県南相馬市 原発事故への対応から市民生活の復興をめざして、保健師ジャーナル, 68(3)：183-190, 2012.
- 15) 尾梶由紀, 大内佳子, 真籠しのぶ, 梶原智栄子, 斉藤真理, 櫻井宏美, 秋山幸恵, 門脇裕美子, 河村真由子, 柳橋知里, 菅原真澄：【東日本大震災 現地活動と支援報告 (2)】大災害時における現地保健師の役割 〈調整とマネジメント〉宮城県東松島市の取り組み、地域保健, 42(11)：38-47, 2011.
- 16) 全国保健師長会：希路：東日本大震災における保健師の体験記、第2版、全国保健師長会, 2016.
- 4) 松井豊：東日本大震災における災害救援者の惨事ストレス、ストレス科学, 33(4)：311-321, 2019.
- 5) 高橋晶：【東日本大震災からの復興に向けて—災害精神医学・医療の課題と展望—】災害救助要員のメンタルヘルス、精神神経学雑誌, 116(3)：224-230, 2014.
- 6) 矢島潤平：災害発生後の支援者支援における心理職の役割、ストレス科学, 33(4)：322-330, 2019.
- 7) Tedeschi R. G., Calhoun L. G.: The Post-traumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress, 9: 455-471, 1996.
- 8) Paton Douglas: Handbook of Posttraumatic Growth Research and Practice, (Calhoun L. G., Tedeschi R. G.), Psychology Press, 2006.
- 9) 井口紗織, 石丸美奈：“自然災害により被災した市町村保健師の外傷後成長”の概念分析、千葉看護学会誌, 27(1)：51-60, 2021.
- 10) 田村由美, 池西悦子：看護のためのリフレクシオンスキルトレーニング、看護の科学社, 2019.
- 11) J. W. クレスウェル, V. L. プラノクラーク, 大谷順子訳：人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン、北大路書房, 2010.
- 12) Lynn, M. R.: Determination and quantification of content validity. Nursing Research, 35(6), 382-385, 1986.
- 13) Polit, D. F., Beck, C. T., & Owen, S. V.: Focus on Research Methods Is the CVI an Acceptable Indicator of Content Validity? Appraisal and Recommendations. Research in Nursing & Health, 30, 459-467, 2007.
- 14) Iguchi Saori, Miyazaki Misako, Ishimaru Mina: Experiences of Public Health Nurses after the Great East Japan Earthquake Lead to Post-Traumatic Growth. Health Emergency and Disaster Nursing, 5(1): 48-57, 2018.
- 15) 舟島なおみ：看護実践・教育のための測定用具ファイル、医学書院, 2006.
- 16) Croke, L.: Public health emergencies underscore the importance of nurse well-being. AORN Journal, 112(2), 5, 2020.
- 17) 宮崎美砂子：災害看護 看護の専門知識を統合して実践につなげる、(酒井明子, 菊池志津子), 南江堂, 2011.
- 18) Marutani M., Harada N., Takase K.: Culturally sensitive disaster nursing by Public health nurses in Japan. Public Health Nursing, 38(6): 984-996, 2021.

引用文献

- 1) 宮崎美砂子：大災害時における市町村保健師の公衆衛生看護活動、保健医療科学, 62(4)：414-420, 2013.
- 2) 松本珠実：災害時において保健師に期待されるもの—今まで果たしてきた役割、新たに果たす役割、保健師ジャーナル, 74(12)：1012-1017, 2018.
- 3) 古屋好美：災害時に求められる受援体制構築—一次の災害に備えるために、保健師ジャーナル, 75(12)：990-994, 2019.

CREATION OF A POSTTRAUMATIC GROWTH INDICATOR TO PROMOTE POSITIVE MEANING TO DISASTER HEALTH ACTIVITIES FOR MUNICIPAL PUBLIC HEALTH NURSES WHO HAVE EXPERIENCED NATURAL DISASTERS

Saori Iguchi

Organization for University Management, Chiba University

KEY WORDS :

indicator, posttraumatic growth, public health nurses, natural disaster

Objective: To develop a posttraumatic growth indicator (hereafter “indicator”) that contributes to the promotion of assigning positive meaning to disaster health activities among municipal public health nurses (PHNs) who have experienced natural disasters, and to examine its content and surface validities.

Methods: A literature review was performed to identify the experiences of municipal public health nurses (PHNs) who faced natural disasters that triggered their posttraumatic growth. The meanings they gave to these experiences were extracted, then categorized by the phase of the disaster cycle, and from these, an indicator was developed. The Content Validity Index (CVI) of the indicator was confirmed through questionnaires and interviews with nine PHNs who had experience conducting health activities in supervisory and managerial positions during natural disasters within the prior 10 years. The content and surface validities of the indicator were examined.

Results: The Scale-CVI of the indicator was 0.91, confirming the overall validity of the indicator. Four items with an Item-CVI of <0.78 were deleted, 31 items were revised based on the participants’ responses, and 5 new items were created. The indicator consisted of a total of 52 items: 11 promoting self-affirmation of PHNs, 16 promoting positive recognition of relationships with community residents and others with whom they collaborated in activities, and 25 to improve PHNs’ sense of values and awareness of their professionalism. In terms of disaster cycle phase, 9 acute phase, 28 subacute phase, 6 chronic phase, and 9 in all phases.

Discussion: This posttraumatic growth indicator could be used by municipal PHNs who have experienced natural disasters as a tool to reflect on their disaster health activities. It may also promote their posttraumatic growth by giving positive meanings to their experiences of disasters.